

目次

第30回東京国際コイン・コンヴェンション (TICC) 記念出版について …	3
第1章 華麗な地模様採用の乙百円券など ……………	5
第2章 国立銀行紙幣(旧券・新券) の話題……………	23
第3章 戦時体制下で超多忙だった印刷局 ……………	43
第4章 連合軍の占領下で発行された A 券 ……………	61
第5章 贋札との戦い、古今東西の贋札事情 ……………	77
第6章 日本紙幣の肖像についての話題 ……………	93
第7章 日本紙幣に使われた漢字 ……………	113
第8章 ドイツ生まれの新紙幣「ゲルマン紙幣」 ……………	127
第9章 お札に描かれた聖徳太子 ……………	141
第10章 日本における緊急・簡易紙幣の製造 ……………	157
第11章 日米で名声を博した凹版彫刻師・大山助一 ……………	171
[付録1] 改造兌換銀券百円券(めがね札)の話題……………	188
[付録2] 不発行となった裏白銀行券の謎……………	189
あとがき ……………	190

はじめに

昭和5年発行には、初めて「聖徳太子」の肖像を用いた乙百円券、名作と言われた重厚な丙拾円券、派手な色彩の丁五円券など、兌換銀行券整理法の施行に伴い、従来の整理される銀行券に代わって、新シリーズの銀行券が発行された。特に乙百円券は、日本人の手になる初めての肖像のデザインと彫刻であるほか、それまでの銀行券とは異なり、肖像人物に関連した法隆寺や正倉院関連の宝物などの図柄をふんだんに採用するなど、荘重で豪華な紙幣の図柄構成となっている。また印刷面でも乙百円券は表凹版1色、地模様3色印刷、裏面は凹版2色、地模様1色の多色印刷を採用、また白線の凹版彩紋(白彩紋)や精緻な白黒透かしなど、当時の最新の偽造防止技術を駆使して製造、発行されたのが特徴であり、乙百円や丙拾円券などの図柄を通して、当時の最新技術を回顧してみたい。



昭和5年発行の乙百円券、丙拾円券、丁五円券

新シリーズの銀行券発行の背景となった改刷に関する調査研究の開始は、意外に早く明治36(1903)～37年頃に遡る。明治30年代後半になると、世界的に製版術の進歩が顕著となり、その最新技術はわが国にも導入された。その結果、偽造団は、例えば銀行券用紙を表裏2枚に剥がして、片面の図柄を金属版に焼き付け、腐食技法を用いて肖像などの凹版原版を作り上げた。また当時の銀行券は、表裏の地模様が淡い色調であったため、図柄があまり目立たず、比較的容易に偽造券が作られて、流通するという事態が多発した。

そのため、明治39(1906)年には当時の銀行券の製造官庁であった内閣印刷局の技師・斉藤知三彫刻課長と、佐伯勝太郎抄紙部長が、また翌40(1907)年には小山初太郎活版部長と、技師・矢野道也製肉課長(後の印刷部長)が相次いで欧米諸国の銀行券用紙・印刷工場などを訪問して、当時の最新紙幣製造技術や偽造防止対策の現状を調査した。その中で特にオーストリアやドイツの銀行券印刷所からは、従来の日本の銀行券が採用してきた黒色インキを使った肖像や地模様の印刷は、写真製版での複製が容易であるため、写真で複製しにくい緑色や青色の刷色に代えること、明治初期では偽造防止対策上有効な技法であったエルヘート凸版を用いた均一な微小地模様印刷はすでに時代遅れとなり、図柄パターンの変化や色調が次第に変化するレインボー方式にすること、印刷面に隠れてしまう紙幣用紙の白黒透かしは、判別が難しいので使用を避けることなどのアドバイスを受けて帰国した。

帰国後の明治40年には当時の高橋是清・日銀副総裁や日銀文書局長等と内閣印刷局関係者との打ち合わせの場が持たれ、その結果1906年にドイツで発行された10マルク券を参考にして、明治43(1910)年9月に「乙五円券」が製造発行された。この銀行券は券面左部分に初めて円形の空白部分を設け、そこに「大黒天」の透かしを抄き入れ、肖像印刷には黒色を避けて緑色インキを使用し、また輪郭枠を少なくし、地模様は極めて淡く印刷したほか、更に裏面には外国で採用されていた着色繊維を用紙に混抄する方法を採用した。

通貨関係者はこの最新式の銀行券の完成に満足したが、一般大衆の紙幣に関する感覚とはずれていたことや、新技術のPR不足もあり、透かしの部分は印刷漏れではないかとか、菅原道真の肖像は青ざめて悲しげだなどの批判が相次ぎ、一般に「幽霊札」と称された。あまりの不評に対処して、同じ構想でデザインしていた「乙拾円券」では急遽透かしの空白部分を変更して、建物を印刷するなどの修正を行い、大正4年に「左和気札」を発行した。これもまた不評であった「乙五円券」の代わりに、急遽従来タイプの「丙五円券」を大正5(1916)